

# FD 講演会を実施して ー 雑感 ー

健康福祉学部・教授

菊池吉晃

第1回の首都大学東京 FD 委員会主催講演会が、平成17年11月4日（金）午後3時、南大沢キャンパス6号館101室において開催された。最初に、本学基礎教育センター長・FD委員会委員長の上野淳先生より講演会主催者としてのご挨拶があった。ひきつづき、平成17年度前期に本学において実施された「基礎教育アンケート」結果について、FD委員会委員長代理の舛本先生から報告がなされた。本学の1年生全員（1630名）を対象とした調査であり、回収率は38.5%であった。「基礎ゼミナール」と「情報リテラシー実践I」については比較的肯定的な回答が得られた一方、「実践英語」、「都市教養プログラム」、「基礎教育の仕組みについて」では全体的に否定的な回答が多いという傾向を示したという分析結果などが報告された。全体的に、今後の本学の基礎教育を向上させていく上で有効な基礎データが得られたものと思われた。

そして、FD講演会のメインは、桜美林大学大学院国際学研究科教授の田中義郎先生に講演をしていただいた。田中先生は桜美林大学大学院部長・国際学研究科長の要職に就いておられ、特色GP審査委員会委員、大学基準協会基準委員会委員、アメリカ大学研究センター国際アドバイザーやUCLA国際教育開発研究センターアドバイザーなど、国内外における高等教育研究の第一人者である。

講演の題名は「全入時代の大学教育：高校教育、大学基礎教育、学部専門教育の接続とFD」であった。田中先生は、さらに、この課題を、1) すなわち、ユニバーサル化し、全入時代を迎えた大学が、2) どのように教育活動を行っていけばよいか。3) そのために、どのようなFD活動が必要か。の3つの話題に分けて、大変わかりやすく丁寧な講義をしてくださった。

まず、大学のユニバーサル化の現状などについて、デ

ータをパワーポイントを使って視覚的に提示しながら解説してくださった。近年、ライフスタイルが変化することで、出生率が低下し少子化が進行することで、本格的な少子高齢化社会が到来し、いわゆる大学全入の時代に入ってきた。結果的に、大学入試や大学教育のあり方においても大きな変化が生じる。また、人材需要においても大きな変化が生じる。すなわち、1) 社会が高度化・複雑化するにしたがって、高い能力の人材が求められることから、高等教育修了者の人材に対する需要が増大する、2) 少子化にともない生産人口が減少することから、労働力の産業間調整が必要となってくる。これらの現象にともなって、今後の大学が担うべき役割も変化する。

このような大学全入時代においては、高校から大学へ進学するにあたって、高校時代で学んできた「学び」を大学の「学び」に切り替える必要があり、「導入教育」としての基礎教育の位置づけは「専門教育への準備」としての機能とともに重要となってきた。

大学入試制度もこれまで大きく移り変わってきており、1980年代半ばには、学力だけに依存しない幅広い評価のあり方を、ということで大学入試センター試験が導入された。1995年には、選抜方法・評価尺度の多様化を推進するというので、AO入試が導入された。



1999年には、「選抜」から「より良き相互選択」、2000年には、「相互選択」の具体案提示が提示された。これら一連の流れはまさに「大学の大衆化」の流れであったといえる。そして、選抜入試においては、より一層の多様性が促進される。平成14年度の大学入学者のうち、特別選抜入学者が占める割合は、私立大学では40%程度、国公立大学でも12%程度になっている。このような傾向は、さらに大学入試実質倍率の低下を加速する。

このような全入時代においては、高校と大学の接続に新しい関係が生じ、中等教育においては大学進学を予定する教育へと、高等教育では「選抜接続」から「教育接続」へと変化する。

大学のユニバーサル化を背景に、今後の大学教育、教育開発はどうあるべきかについて、田中先生は、「多様性と専門性を追求し、二兎を追って二兎を得る！」と強く主張しておられた。

ユニバーサル化に対応して、従来の「完成教育」からの転換を図らなければならない。すなわち、決定されているあるいは予測がついている未来から、決定されていない予測が成り立ちにくい未来への転換を、どのように教育プログラムに組み込むかが大きな課題である、とおっしゃっておられた。

この際、多様性と如何に向き合うかが大きな課題であり、従来の共通の必修科目から統合必修科目への転換を図る必要やリベラルアーツ（教養）とプラクティカルアーツ（実用）の（総合ではなく）統合による科目を作成する必要がある。また、人文、自然、社会といった伝統的な学問研究を現代の諸問題と結びつける、などがその対応として考えられる。

また、こうした教育プログラムのもとでも、学生自身も自らの目標と照らし合わせて適切な科目選択をおこなない、自分の目標達成のための「学び」の設計をおこなわなければならない。その際、学生自身に適切な判断ができるのか、それを誰がどのような方法で指導するのか、などが大きな課題となることを指摘なさっておられた。

したがって、学生においては、自分自身の最終目標（絶対的到達目標、Standard）をどのように設定するか、それを達成するための下位目標（相対的到達目標、Sub-standard）をどのように設定するか、という視点がきわめて重要である。同時に、その目標を達成するた

めに、教員は、シラバスの内容やその授業の到達目標（Benchmark）を明確にすることが要求される。そして、学生が、どのような科目群をどのような道筋で学習すれば、自分の目標を達成できるかというラーニングパス（Learning Path）を明確にすることが重要である。このような、いわば「学びの地図」を学生に持たせることがきわめて重要である。

このような望ましい「学び」を構築するうえで最も重要なのは、「学び」に関わる、学生、教員、事務職員間の相互理解が不可欠であるが、一般には、それぞれの「言語」や考え方が異なることが多いため、相互理解が難しい。このような観点から、学生、教員、事務職員の相互理解を深め、理想的な「学び」の構築や関連する問題を共有する仕組みを作り上げることもFDの重要な任務かもしれない。

舛本先生の基礎教育アンケートの結果報告に示されたように、誕生したばかりの首都大学東京においては、その基礎教育の教育システムにはまだまだ多くの問題が山積していますが、これらの問題をFD的な観点から取り組むうえで、田中先生のご講演はきわめて有効で大変示唆に富む内容であったと感慨深く拝聴させていただきました。また、本講演会はおりしも首都大学東京の大学祭と同じ日の開催でしたが、教員の皆様をはじめ学生や職員など、多数の方々にご参加いただきました。この熱意のもとに、首都大学としての理想の「学び」が少しでも早く構築できたら、という思いで一杯になったFD講演会でした。